

水田の有効利用で飼料自給率アップする切り札、飼料用米

最近、畜産物の名称におコメを連想させるものが見られるようになりました。例えば、こめ育ち豚、やまと豚米(まい)らぶ、玄米玉子などです。これらは、トウモロコシの代わりにコメ(飼料用米)を使って育てた肉や卵で、豚肉では脂肪中のリノール酸の減少、オレイン酸の増加によりヘルシーでおいしいことが実証されつつあります。また、飼料用米を主体にした鶏の卵の黄身の色は、レモンイエローとなります。家畜飼料のほとんどは輸入したトウモロコシなどで、飼料自給率はわずか26%であり、飼料自給率をあげることはきわめて重要です。生産調整で主食用米が作られていない田んぼなどで飼料用米を栽培し家畜へ給与することは、飼料自給率の向上のほか、耕作放棄地の解消にも貢献します。

(独)農業・食品産業技術総合研究機構等では、気候区分ごとに、食用米と識別性があり、10アール当たり700～800kg(主食用米は500kg程度)の多収の飼料用米品種「きたあおば」、「モミロマン」等を開発し、家畜への効率的な飼料用米の給与法を研究開発中です。

主食用米の需要が減少し、米余りが常態化する中、多収米品種に対する要望はしばらく消えていましたが、「良食味研究」が主流の情勢の中でも、(独)農業・食品産業技術総合研究機構を中心とした研究機関では、こつこつと多収化に関する研究開発が続けられてきました。長期的な視点から粘り強く育種を続けてきたことが、今日の多収米品種の登場に役立っています。(農林水産技術会議事務局 研究専門官 佐藤宏之)

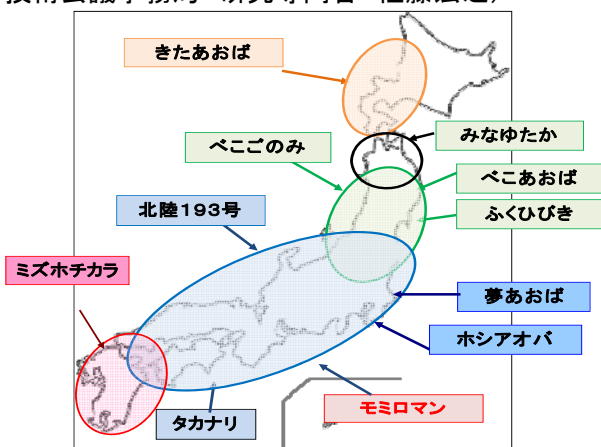


図 多収米品種の栽培適地

表 多収米品種の育成地と収量

品種名	育成年	育成地	栽培適地	粗玄米収量 (kg/10a)
きたあおば	2008	北海道農業研究センター	寒地	825
べこごのみ	2006	東北農業研究センター	寒冷地	686
北陸193号	2007	中央農業総合研究センター	温暖地	780
夢あおば	2004	中央農業総合研究センター	温暖地	722
モミロマン	2008	作物研究所	温暖地	823
ミズホチカラ	2009	九州沖縄農業研究センター	暖地	725



写真1 やまと豚米らぶ



写真2 玄米玉子

